

DIALOG(R) File 351:Derwent WPI
(c) 2005 Thomson Derwent. All rts. reserv.

012120446

WPI Acc No: 1998-537358/*199846*

XRAM Acc No: C98-161376

Colouring shampoo composition - contains N-alkylamidoalkanol sulphate ester

Patent Assignee: KAO CORP (KAOS)

Number of Countries: 001 Number of Patents: 001

Patent Family:

Patent No	Kind	Date	Applicat No	Kind	Date	Week
JP 10236929	A	19980908	JP 9746154	A	19970228	199846 B

Priority Applications (No Type Date): JP 9746154 A 19970228

Patent Details:

Patent No	Kind	Lan Pg	Main IPC	Filing Notes
JP 10236929	A	8	A61K-007/075	

Abstract (Basic): JP 10236929 A

Colouring shampoo composition comprises N-alkylamidoalkanol sulphate ester of formula (R1)(R2)NC(O)R3O(R4O)nSO3M (I). In (I), R1 = 6-22C alkyl or alkenyl; R2 = 1-22C alkyl or alkenyl or H; R3 = 1-5C alkylene; R4O = 2-3 oxyalkylene; n = 0-20; M = H, alkaline metal, alkaline earth metal, ammonium, 2-9C alkanolammonium, 1-22C alkyl- or alkenyl ammonium, 1-18C alkyl or alkenyl-substituted pyridinium or basic amino acid.

ADVANTAGE - High foamability and high prolonged gloss can be attained.

Dwg.0/0

Title Terms: COLOUR; SHAMPOO; COMPOSITION; CONTAIN; N; ALKYL; AMIDO; ALKANOL; SULPHATE; ESTER

Derwent Class: A96; D21; E19

International Patent Class (Main): A61K-007/075

International Patent Class (Additional): A61K-007/13

File Segment: CPI

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-236929

(43)公開日 平成10年(1998)9月8日

(51)Int.Cl.⁶

A 61 K 7/075
7/13

識別記号

F I

A 61 K 7/075
7/13

審査請求 未請求 請求項の数1 OL (全8頁)

(21)出願番号

特願平9-46154

(22)出願日

平成9年(1997)2月28日

(71)出願人 000000918

花王株式会社

東京都中央区日本橋茅場町1丁目14番10号

(72)発明者 鈴木 康生

東京都墨田区文花2-1-3 花王株式会

社研究所内

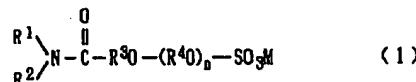
(74)代理人 弁理士 有賀 三幸 (外3名)

(54)【発明の名称】 カラーリングシャンプー組成物

(57)【要約】

【解決手段】 直接染毛剤及び次の一般式(1)

【化1】

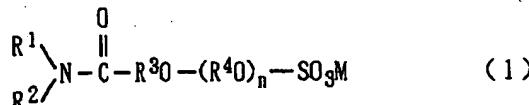


(式中、R¹は炭素数6~22のアルキル基又はアルケニル基、R²は炭素数1~22のアルキルもしくはアルケニル基又は水素原子、R³は炭素数1~5のアルキレン基、R⁴Oは炭素数2~3のオキシアルキレン基、Mは水素原子、アルカリ金属、アルカリ土類金属、アンモニウム等、nは0~20の任意の数を示す。)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩を含有するカラーリングシャンプー組成物。

【効果】 起泡性に優れ、皮膚刺激がなく、また光沢があり長持ちする毛髪色を与えることができる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 少なくとも1種の直接染毛剤及び次の一般式(1)
〔化1〕



(式中、R¹は炭素数6～22の直鎖又は分岐鎖のアルキル又はアルケニル基を示し、R²は炭素数1～22のアルキルもしくはアルケニル基又は水素原子を示し、R³は炭素数1～5の直鎖又は分岐鎖のアルキレン基を示し、R⁴Oは炭素数2～3のオキシアルキレン基、nは0～20の任意の数を示し、n個のR⁴Oは同一でも異なっていてもよい。Mは水素原子、アルカリ金属、アルカリ土類金属、アンモニウム、総炭素数2～9のアルカノールアンモニウム、総炭素数1～22のアルキルアンモニウムもしくはアルケニルアンモニウム、炭素数1～18のアルキルもしくはアルケニル置換ピリジニウム、又は塩基性アミノ酸を示す。)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩を含有するカラーリングシャンプー組成物。

【発明の詳細な説明】

[0001]

【発明の属する技術分野】本発明は、洗髪時の泡立ちがよく、皮膚刺激がなく、毛髪を柔軟かつしなやかにし、更に光沢があり、長持ちする毛髪色を与えるカラーリングシャンプー組成物に関する。

{0002}

【従来の技術】近年、自分の髪の色のニュアンスを変えたい、という消費者の要望に応えるべく、カラーリングシャンプーが上市されている。カラーリングシャンプーは、通常、水性媒体中にアルキル硫酸塩やアルキルエーテル硫酸塩等のアニオン性界面活性剤と少なくとも1種の直接染毛剤、すなわち半永久的染毛剤とが含有されている。

【0003】しかしながら、このような組成のシャンプー一組成物は、良好な泡立ちを示すものの、着色の強度は満足できるものではなく、洗髪等で染色が薄れたり、消失することがあった。

【0004】これに対し、上記以外のアニオン性界面活性剤、例えばスルホコハク酸塩又はポリエーテルカルボン酸やこれらの水溶性塩を用いて、このような欠点を克服する試みがあったが、着色などの面で、いまだ満足できるものではなかった。また、シャンプー組成物は皮膚に対して十分穏和なものが好ましい。

[0005]

【発明が解決しようとする課題】従って、本発明の目的は、使用時に良好に泡立ち、着色の強度が十分で、かつ皮膚刺激のないカラーリングシャンプー組成物を提供する。

ることにある。

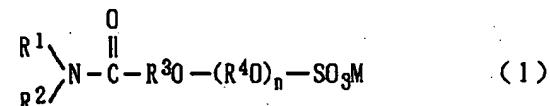
{0006}

【課題を解決するための手段】斯かる実情において本発明者は鋭意研究を行った結果、直接染毛剤と下記一般式(1)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩を含有せしめれば、泡立ち、皮膚穏和性及び着色強度に優れるカラーリングシャンプーシャンプーが得られることを見出し本発明を完成した。

【0007】すなわち、本発明は、少なくとも1種の直接染毛剤及び次の一般式(1)

[0008]

【化2】



【0009】(式中、R¹は炭素数6～22の直鎖又は分岐鎖のアルキル又はアルケニル基を示し、R²は炭素数1～22のアルキルもしくはアルケニル基又は水素原子を示し、R³は炭素数1～5の直鎖又は分岐鎖のアルキレン基を示し、R⁴Oは炭素数2～3のオキシアルキレン基、nは0～20の任意の数を示し、n個のR⁴Oは同一でも異なっていてもよい。Mは水素原子、アルカリ金属、アルカリ土類金属、アンモニウム、総炭素数2～9のアルカノールアンモニウム、総炭素数1～22のアルキルアンモニウムもしくはアルケニルアンモニウム、炭素数1～18のアルキルもしくはアルケニル置換ビリジニウム、又は塩基性アミノ酸を示す。)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩を含有するカラーリングシャンプー組成物を提供するものである。

[0010]

【発明の実施の形態】本発明に用いられるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩は、前記一般式(1)で表わされるものである。一般式(1)中、R¹で示される炭素数6～22のアルキル基としては、例えば直鎖又は分岐鎖のヘキシル、ヘプチル、オクチル、ノニル、デシル、ウンデシル、ドデシル、トリデシル、テトラデシル、ペンタデシル、ヘキサデシル、ヘプタデシル、オクタデシル、ノナデシル、イコシル、ヘニコシル、ドコシル基が挙げられ、炭素数6～22のアルケニル基としては、例えば直鎖又は分岐鎖のヘキセニル、ヘプテニル、オクテニル、ノネニル、デセニル、ウンデセニル、ドデセニル、トリデセニル、テトラデセニル、ペントデセニル、ヘキサデセニル、ヘプタデセニル、オクタデセニル、ノナデセニル、イコセニル、ヘニコセニル、ドコセニル基が挙げられる。これらのうち、R¹としては、起泡性の点で炭素数6～22の直鎖又は分岐鎖のアルキル基が好ましく、特に炭素数8～18の直鎖アルキル基が好ましい。

【0011】また、一般式(1)中、R²は炭素数1～22のアルキルもしくはアルケニル基又は水素原子を示すが、ここで炭素数1～22のアルキル基としては、例えばメチル基、エチル基、n-ブロピル基、i-ブロピル基、n-ブチル基、i-ブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、直鎖又は分岐鎖のペンチル、ヘキシル、ヘプチル、オクチル、ノニル、デシル、ウンデシル、ドデシル、トリデシル、テトラデシル、ペントデシル、ヘキサデシル、ヘptaデシル、オクタデシル、ノナデシル、イコシル、ヘニコシル、ドコシル基が挙げられ、炭素数2～22のアルケニル基としては、例えばビニル基、直鎖又は分岐鎖のプロペニル、ブチリル、ベンテニル、ヘキセニル、ヘプテニル、オクテニル、ノエニル、デセニル、ウンデセニル、ドセニル、トリデセニル、テトラデセニル、ペントデセニル、ヘキサデセニル、ヘptaデセニル、オクタデセニル、ノナデセニル、イコセニル、ヘニコセニル、ドコセニル基が挙げられる。これらの内、R²としては、水素原子又はメチル基が、起泡性、安全性及び化学的安定性の面から好ましい。また、R¹、R²のアルキル基、アルケニル基又はココイル基の如き混合物であってもよい。

【0012】一般式(1)中、R³は炭素数1～5の直鎖又は分岐鎖のアルキレン基を示すが、具体例としては、メチレン基、エチレン基、トリメチレン基、テトラメチレン基、ペントメチレン基、プロピレン基、2-メチルブチレン基等が挙げられる。これらのうち、R³としては、メチレン基、トリメチレン基、ペントメチレン基、2-メチルブチレン基、特にメチレン基が起泡性及び化学的安定性の点で好ましい。

【0013】また、R⁴Oは炭素数2～3のオキシアルキレン基を示すが、オキシエチレン基又はオキシプロピレン基が好ましい。nは、0～20の任意の数を示すが、0～10の数、特に0が好ましい。またn個のR⁴Oは同一でも異なっていてもよい。

【0014】一般式(1)中、Mは水素原子、ナトリウムもしくはカリウム等のアルカリ金属、マグネシウムもしくはカルシウム等のアルカリ土類金属、アンモニウム、総炭素数2～9のアルカノールアンモニウム、総炭素数1～22のアルキルアンモニウムもしくはアルケニルアンモニウム、炭素数1～18のアルキルもしくはアルケニル置換ピリジニウム、又は塩基性アミノ酸を示すが、ナトリウム、カリウム、アンモニウム、総炭素数2～9のアルカノールアンモニウム、特にナトリウム、アンモニウム、トリエタノールアンモニウムが起泡性の点から好ましい。

【0015】一般式(1)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩としては、R¹が炭素数6～22の直鎖又は分岐鎖のアルキル基、R²が水素原子又はメチル基、R³が炭素数1～5の直鎖又は分岐鎖のアルキレン基、R⁴Oがオキシエチレン基又はオキ

シプロピレン基、nが0～10の任意の数、Mがアンモニウム、ナトリウム、カリウム又は総炭素数2～9のアルカノールアンモニウムのものが好ましく；特に、R¹が炭素数8～18の直鎖アルキル基、R²が水素原子又はメチル基、R³が炭素数1～5の直鎖アルキレン基、nが0、Mがアンモニウム、ナトリウム又はトリエタノールアンモニウムのもの；更に、R¹が炭素数8～18の直鎖アルキル基、R²が水素原子、R³がメチレン基、ペントメチレン基又は2-メチルブチレン基、nが0、Mがアンモニウム、ナトリウム又はトリエタノールアンモニウムのもの；更にまた、R¹が炭素数8～18の直鎖アルキル基、R²が水素原子、R³がメチレン基、nが0、Mがアンモニウム、ナトリウム又はトリエタノールアンモニウムのものが好ましい。

【0016】本発明に用いる一般式(1)で表わされるN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩は、例えば特開平7-267917号公報記載の方法により製造することができる。

【0017】N-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩(1)の好ましい例を具体的に示せば、次の通りである。

【0018】CH₃(CH₂)₁₁NHCOCH₂OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₅OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₉NHCOCH₂OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₁₁NHCOCH₂OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₂OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₃OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₄OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(C_{H₂})₅OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCOCH₂CH(CH₃)CH₂CH₂OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCOCH₂CH(CH₃)CH₂CH₂OSO₃K、CH₃(CH₂)₁₃NHC_O(CH₂)₃OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₃NHC_O(CH₂)₃OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₁₃NHC_O(CH₂)₄OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₉NHC_O(CH₂)₃OSO₃Na、CH₃(CH₂)₉NHC_O(CH₂)₃OSO₃HN(CH₂CH₂OH)₃、CH₃(CH₂)₉NHC_O(CH₂)₃OSO₃H₂N(CH₂CH₂OH)₂、CH₃(CH₂)₉NHC_O(CH₂)₃OSO₃H₃NCH₂CH₂OH、CH₃(CH₂)₉NHC_O(CH₂)₅OSO₃Na、CH₃(CH₂)₇NHC_O(CH₂)₄OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁N(CH₃)CO(CH₂)₃OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₃N(CH₃)CO(CH₂)₄OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₃OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₄OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₅OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₂OSO₃Na、CH₃(CH₂)₁₁NHCO(CH₂)₃OSO₃NH₄、CH₃(CH₂)₉NHCOCH₂OSO₃Na、C

【0019】N-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩(1)は、単独で又は2種以上を組合せて使用することができる。また本発明のカラーリングシャンプー組成物中の配合量は特に限定されるものではないが、全組成中に0.1～50重量%配合するのが好ましく、特に0.5～40重量%、更に1.0～30重量%配合すると、泡立ちが高いので好ましい。

【0020】本発明では、上記化合物(1)以外のアニオン性界面活性剤も用いることができる。このようなアニオン性界面活性剤としては、一般的に使用されてい

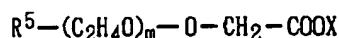
る、硫酸塩、スルホン酸塩、カルボン酸塩又はアルキル磷酸塩型のもの、例えば、公知のC₁₀～C₁₈—アルキル硫酸塩及びアルキルエーテル硫酸塩、例えば、特にC₁₂～C₁₄—アルキルエーテル硫酸塩、1～4個のエチレンオキシド基をその分子内に有するラウリルエーテル硫酸塩、更にモノグリセリド硫酸塩、脂肪酸アルカノールアミドのエトキシ化とこれに続く硫酸化によって得られる脂肪酸アミド硫酸塩及びそのアルカリ塩、並びに穏和な及び皮膚親和性の洗剤である長鎖モノー及びジアルキル磷酸エステルの塩が挙げられる。

【0021】また、適当なスルホン酸塩としては、α—オレフィンスルホン酸エステル又はその塩及び特にスルホコハク酸塩、更にスルホコハク酸半エステルのアルカリ塩、例えば、モノオクチルスルホコハク酸エステルのニナトリウム塩及び長鎖モノアルキルエトキシカルボハク酸エステルのアルカリ塩、例えば、ラウリルエーテルスルホコハク酸二ナトリウムが挙げられる。このうち、長鎖モノアルキルエトキシカルボハク酸エステルのアルカリ塩が特に好ましい。また、上記アニオン界面活性剤の混合物、例えば、α—オレフィンスルホン酸塩とスルホコハク酸塩との混合物、好ましくは1：3～3：1の比率の混合物を使用することも好適である。

【0022】カルボン酸塩として好ましいものとしては、例えば、次式

【0023】

【化3】



【0024】〔式中、R⁵は炭素数8～20のアルキル基、好ましくは炭素数12～14のアルキル基を示し、mは1～20、好ましくは4～17の数を示し、Xは水素原子、好ましくはナトリウム、カリウム、マグネシウム、及びアルキル又はヒドロキシアルキル基で置換されていてもよいアンモニウムの群から選ばれるカチオンを示す。〕で表わされるポリアルキルエーテルカルボン酸及びその塩が挙げられ、このものは、本発明組成物中0.1～5重量%、特に0.5～3重量%含有させることが好ましい。この化合物はすでに公知であり、商品名「AKYPO-SOFT（登録商標）」で市場で販売されている。

【0025】本発明に用いるアニオン性界面活性剤の概論は、K. Schraderのモノグラフ、「化粧品の基礎及び調剤(Grundlagen und Rezepturen der Kosmetika)」第2版、(1989年、Huethig Buchverlag, Heidelberg)、683～691頁に記載されている。

【0026】本発明のカラーリングシャンプー組成物中のアニオン性界面活性剤の全配合量は、全組成物中0.5～2.5重量%、特に2.5～1.5重量%、更に5～1.0重量%とすることが好ましい。

【0027】基本的に公知の構造のタンパク質／脂肪酸

結合生成物も、特に全カラーリングシャンプー組成物の約0.5重量%～5重量%、好ましくは1重量%～3重量%の比率で他のアニオン性界面活性剤と混合して好適に用いられる。

【0028】本発明のカラーリングシャンプー組成物には、更にノニオン性界面活性剤の1種又は2種以上を組成物全体の1～15重量%、特に2.5～10重量%配合してもよい。好ましいノニオン性界面活性剤としては例えば、次式

【0029】

【化4】



【0030】〔式中、R⁶は炭素数8～18のアルキル基を示し、Gは炭素原子5～6の糖類残基を示し、pは0～10の数を示し、xは1.2～2.5の数を示す〕で表わされるアルキル（ポリ）グリコシド類が挙げられる。

【0031】これらのアルキル（ポリ）グリコシドは液体シャンプー組成物の成分として使用した場合、良好な皮膚親和性及び優れた起泡力を示す。

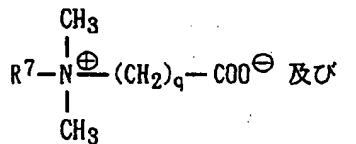
【0032】他の適当なノニオン性界面活性剤成分としては、ヤシ油脂肪酸モノエタノールアミド及びミリスチン酸モノエタノールアミドのような長鎖脂肪酸モノー及びジアルカノールアミド（これらはまた増泡剤(foam booster)としても使用することができる）並びにポリエチレングリコールソルビタンステアリン酸エステル、脂肪酸ポリグリコールエステル又は例えば商品名「ブルロニックス(Pluronics)」で上市されているようなエチレンオキシドとプロピレンオキシドとの縮合物のような種々のソルビタンエステル等が挙げられる。

【0033】またC₈～C₁₈—脂肪族アルコールエトキシレート、例えば分子当たり10～20個のエチレンオキシド基を有するもの及び分子当たり1～20個のエチレンオキシド基を有するエトキシ化C₈～C₁₈—脂肪酸モノアルカノールアミドも使用することができる。

【0034】アニオン性界面活性剤と好ましいノニオン性界面活性剤であるアルキル（ポリ）グリコシドとの混合物並びにその液体シャンプーへの使用は、例えば、ヨーロッパ特許第70,074号からそれ自体公知である。基本的に、この特許に開示されているアルキル（ポリ）グリコシドも本発明に適しており、ヨーロッパ特許出願第358,216号に記載されているスルホコハク酸エステルとアルキル（ポリ）グリコシドとの混合物も同様である。更にアミンオキシド系界面活性剤も、例えば全組成物に対して0.25重量%～5重量%、好ましくは0.5重量%～3.5重量%の比率で使用することができる。アミンオキシドとしてはラウリルジメチルアミンオキシド等のC₁₂～C₁₈—アルキルジメチルアミンオキシド、C₁₂～C₁₈—アルキルアミドプロピル若しく

はエチルアミンオキシド、C₁₂～C₁₈アルキルジ(ヒドロキシエチル)アミンオキシド若しくはC₁₂～C₁₈アルキルジ(ヒドロキシプロピル)アミンオキシド又はアルキル鎖中にエチレンオキシド及び/又はプロピレンオキシド基を有するアミンオキシド等のアミンオキシド類が挙げられる。

【0035】本発明のカラーリング組成物には、全組成物に対して0.1重量%～5重量%、好ましくは0.5重量%～3重量%の比率で両性界面活性剤を配合しても

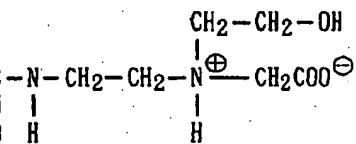


よい。このような両性界面活性剤としては種々の公知のベタイン類、例えば脂肪酸アミドアルキルベタイン及びスルホベタイン、具体的にはラウリルヒドロキシスルホベタインが挙げられ、更に長鎖アルキルアミノ酸も好ましい。詳細には、次のものが挙げられる。

【0036】(a) ベタイン類

【0037】

【化5】

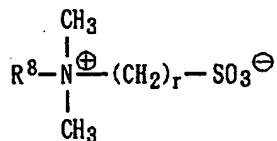


【0038】[式中、R⁷は炭素数8～18のアルキル基を示し、qは1～3の数を示す]

(b) スルホベタイン類

【0039】

【化6】

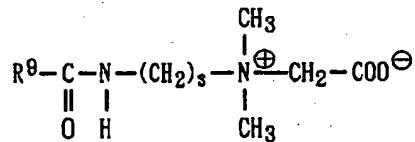


【0040】[式中、R⁸は炭素数8～18のアルキル基を示し、rは1～3の数を示す]

(c) アミドアルキルベタイン類

【0041】

【化7】



【0042】[式中、R⁹は炭素数8～18のアルキル基を示し、sは1～3の数を示す]

(d) 長鎖アルキルアミノカルボン酸

【0043】本発明のカラーリングシャンプー組成物には、上記の成分の他シャンプー組成物に通常用いられている成分を含有してもよい。このような成分としては、キレート剤、防腐剤、pH調節剤、無機塩等の粘度調整剤、芳香剤、パール光沢剤、増粘剤、保湿剤、ホホバ油等の植物性油及び動物性油等が挙げられる。また、前記Schraderの文献の695～722頁の添加剤のリストに記載された成分も用いることができる。

【0044】本発明のカラーリングシャンプー組成物に好ましい添加剤は、ヘアコンディショニング剤であり、特開平2-42013号には、アルキル(ポリ)グリコシド界面活性剤と一緒にカチオン性ポリマーを使用することが記載されており、ここに記載されているカチオン

化セルロース等のカチオン性ポリマーが本発明の組成物のコンディショニング添加剤として適している。カチオン性ポリマーは全組成物中0.1～2重量%、特に0.25～1.25重量%配合することが好ましい。

【0045】上記以外のコンディショニング剤としては、公知のタンパク質加水分解物が挙げられ、これは全組成物中0.25～5重量%、特に0.5～2.5重量%配合することが好ましい。更に水溶性コラーゲンやその誘導体もコンディショニング成分として挙げられる。

【0046】本発明に用いる直接染毛剤は基本的に公知のものを用いることができる。その種類及び量は、所望により適宜決定すればよいが、通常全組成物中0.01～2.5重量%、特に0.05～1重量%配合することが好ましい。また染料としてはカチオン染料が好ましい。具体的に、好ましい染料としては次のものが例示される。

【0047】ペーシックブラウン17, C. I. (カラインデックス) -No. 12, 251; ペーシックブラウン16, C. I. -No. 12, 250; ペーシックレッド1, C. I. -No. 45, 160; ペーシックレッド76, C. I. -No. 12, 245; ペーシックイエロー2, C. I. -No. 41, 000; ペーシックイエロー57, C. I. -No. 12, 719; ペーシックブルー7, C. I. -No. 42, 595; ペーシックブルー8, C. I. -No. 42, 563; ペーシックブルー99, C. I. -No. 56, 059; ペーシックバイオレット1, C. I. -No. 42, 535; ペーシックバイオレット3, C. I. -No. 42, 555; ペーシックバイオレット10, C. I. -No. 45, 170; ペーシックグリーン4, C. I. -No. 42, 000; アシッドイエロー1, C. I. -No. 10, 316; アシッドイエロー9, C. I. -No. 13, 015; ディスパースイエロー3, C. I. -No. 11, 855; ディスパースイエロー1, C. I. -No. 10, 345; 及びソルベントブラック5, C. I. -No. 50, 415;

【0048】また、直接染毛剤は、前記Schraderの文献の800～805頁にも記載があり、これらも用いることができ、更にその他の直接染毛剤、例えば、ヘンナ、カミツレ、アカネの根、白檀又はクルミのような天然直接染料も更に使用することができる。明るい毛髪色を得るために蛍光増白剤140のような光学的増白剤を（任意に）追加して使用することも可能である。

【0049】

実施例1

$n\text{-C}_{12}\text{H}_{25}\text{N}(\text{CH}_3)\text{CO}(\text{CH}_2)_3\text{OSO}_3\text{NH}_4$	10.00 (重量%)
デシルポリグルコシド (P. D. : 約1.5)	5.00
ココナツアミドプロピルベタイン	3.00
ラウリルヒドロキシスルタイン (Lauryl hydroxysultaine)	1.50
PEG-10-ソルビタントリステアレート	1.00
PEG-60-水素化ひまし油	1.00
EDTA	0.50
ペイシックブラウン17	0.08
ペイシックレッド76	0.01
ペイシックイエロー57	0.01
香料、防腐剤	適量
水を加えて	100.00

【0051】この良好な泡立ち性を有するシャンプーを適用した後、強い、永久的で光沢のある褐色の毛髪色が得られた。また、皮膚に対する刺激はなかった。

実施例2

$n\text{-C}_{12}\text{H}_{25}\text{NHCO}(\text{CH}_2)_2\text{OSO}_3\text{Na}$	7.00 (重量%)
ラウリルエーテル硫酸ナトリウム	7.00
ポリソルベート20	1.00
ジメチルラウリルアミノキシド	2.00
パール光沢剤 (Euperlan (登録商標)PK900)	2.00
PEG-4-菜種モノエタノールアミド	3.00
ジメチコーンコポリオール	1.00
カチオン化セルロース誘導体 (Polymer (登録商標)JR 400)	0.50
ペイシックブラウン17	0.001
ペイシックイエロー57	0.01
C. I. 蛍光増白剤(Fluorescent Brightener) 140	0.08
香料、防腐剤	適量
水を加えて	100.00

【0053】この泡立ちのよいシャンプーを適用した後、光沢のある明るい金髪色が得られた。また、皮膚又は粘膜に対する刺激はなかった。

実施例3

$n\text{-C}_{10}\text{H}_{21}\text{NHCOCH}_2\text{OSO}_3\text{Na}$	6.00 (重量%)
ラウリルエーテルスルホコハク酸二ナトリウム	4.00
ジメチルラウリルアミノキシド	3.00
ラウリルポリグルコシド (P. D. : 約1.5)	2.00
PEG-18-グリセリルオレエート/ココエート	2.00
ラウリルヒドロキシスルタイン	1.00
PEG-15-グリセリルイソステアレート	1.00

【実施例】以下に実施例を挙げて本発明を更に詳細に説明するが本発明はこれらに限定されるものではない。なお、本発明の組成物の調製は、水中で個々の成分を混合することによって行った。又、成分は原則として CTF A名 (CTFA International Cosmetic Ingredient Dictionary 第4版) によった。

【0050】

【表1】

【0052】

【表2】

【0054】

【表3】

可溶化剤 (Trideceth-8)	1. 00
スクロースラウレート	0. 50
ポリクオータニウム (Polyquaternium) - 7	0. 50
ペイシックレッド 7 6	0. 08
ペイシックイエロー 5 7	0. 01
ペイシックブルー 9 9	0. 01
ヘンナ抽出物	0. 10
香料、防腐剤	適量
水を加えて	100. 00

【0055】この強く泡立つシャンプーは、光沢のある赤い毛髪色を与えた。皮膚又は粘膜に対する刺激はなかった。

【0056】

【表4】

実施例4

n-C ₁₂ H ₂₅ NHCO(CH ₂) ₅ OSO ₃ NH ₄	5. 00 (重量%)
ラウリルサルコシンエトナトリウム塩	4. 00
デシルポリグルコシド (P. D. : 約1. 5)	3. 00
ココナツアミドプロピルベタイン	3. 00
PEG-120-メチルグルコースジオレエート	2. 50
ポリグリセリルカプリネート	1. 00
ペイシックブルー 9 9	0. 03
香料、防腐剤	適量
水を加えて	100. 00

【0057】このシャンプーは気泡性に優れ、白髪混じりの毛髪に使用すると、この組成物は光沢をよみがえらせ、黄ばみをカバーした。また、皮膚や粘膜に対する刺激はなかった。

【0058】試験例1

公知の界面活性剤と比較して、本発明によりカラーリングシャンプーにN-アルキルアミドアルカノール硫酸エ

ステル塩を使用した場合の優れた効果を、下記の比較試験によって示す。0. 1重量%のペイシックレッド 7 6 及び2重量%の下記の表に示すアニオン性界面活性剤を含有する6個の異なる水性染料溶液を調製した。

【0059】

【表5】

溶液番号	界面活性剤
1	ラウリルエーテルスルホカハク酸二ナトリウム
2	n-C ₁₂ H ₂₅ NHCO(CH ₂) ₂ OSO ₃ Na
3	n-C ₁₂ H ₂₅ NHCO(CH ₂) ₃ OSO ₃ NH ₄
4	n-C ₁₂ H ₂₅ NHCO(CH ₂) ₅ OSO ₃ Na
5	n-C ₁₂ H ₂₅ NHCO(CH ₂) ₅ OSO ₃ NH ₄
6	n-C ₁₂ H ₂₅ NHCOCH ₂ OSO ₃ Na

【0060】毛髪の房を40℃で20分間処理し、次いで水ですすいで、公知のミノルタCR200により毛髪光沢についての△E値を測定した。その結果、本発明のN-アルキルアミドアルカノール硫酸エステル塩を含有するシャンプーはいずれも、△E値が高く優れた効果を示した。

【0061】

【表6】

【0062】

【発明の効果】本発明のカラーリングシャンプー組成物は、洗髪時の泡立ちがよく、皮膚刺激がなく、毛髪を柔軟かつしなやかにし、更に光沢があり長持ちする毛髪色を与える。

溶液番号	ΔE
1	22.6
2	43.2
3	48.5
4	54.3
5	62.2
6	58.1